

茶ゆかりの里四季の俳句会（平成二十六年十月〜十二月分）

選者 高山俳壇 片桐 嘉弘先生

特選 天母逝きて母の座のある炬燵かな 愛知県 平野辰美

炬燵にはそれぞれ座る所が自然と決まるものである。亡くなったお母さんの座っていた場所が空白になっている。淋しさがひとしお。

特選 地熱爛の独りの酔いに一茶の句 栃木県 五十畑文男

熱爛で一杯やっている。酔ふ程に一茶の句がうかんできた。己にだって出来そうな句だけれど難しいものである。

特選 人喜寿の秋飲み且つ眠りよく忘れ 群馬県 清水一静

喜寿ともなれば体力もやや衰えを感じる頃である。しかしよく飲み、よく眠り、そして忘れ上手。健康であればこそである。

入選 高井野の秋色深き一茶館 須坂市 一色正次

入選 耳遠くなるや一途に稲架を組む 長野市 玉井玲子

入選 天高し外湯廻りの下駄の音 山梨県 柿沢英弘

入選 虫の音のいつか時雨となりにけり 群馬県 土屋はじめ

入選 夜鷹そば昔なつかし雪の町 群馬県 岡村妃呂子

入選 奥信濃風もとんぼも透きとほる 松本市 福田喜美子

入選 霜降りて草木のねむる一茶館 山梨県 有泉 環